

神戸改革派神学校
第3学期開講講演

《講師》 ステファン・ファン・デア・ヴァット教授

2025年1月7日(火)
午後1時30分～3時30分
於 チャペル
司会 大西良嗣常勤講師
奏楽 安藤明子姉

＜プログラム＞

賛美 234A番
聖書朗読 イザヤ書49章6節
使徒言行録13章46～48節

祈祷
講師紹介
講演

「世界宣教の現在の動向を踏まえた、日本における宣教学の意義」

質疑応答
主の祈り

(茶菓・交わり／於学生寮1階食堂)

《講師プロフィール》

1977年南アフリカ共和国生まれ。ステレンボッシュ大学神学部(1999年B.Th. 2000年M.Div. 2001年Lic.Theol. 2002年M.Th. 臨床牧会教育 2007年D.Th. 実践神学)に学ぶ。2006年南アフリカ Aliwal North オランダ改革派教会牧師。2009年来日、四国中会・日本キリスト改革派徳島教会協力宣教師。2016年より本校専任教授に就任。現在、日本キリスト改革派北神戸キリスト教会協力宣教師。担当科目：宣教学、牧会学

神戸改革派神学校
〒651-1306 神戸市北区菖蒲が丘3-1-3
TEL 078-952-2266 FAX 078-952-2165

第3学期 開講講演会・2025年1月7日(火) 13:30～15:30

主題:「世界宣教の現在の動向を踏まえた、日本における宣教学の意義」

講師:ステファン・ファン・デア・ヴァット教授

① はじめに

火が燃えることによって存在するように、教会は宣教によって存在する。言い換えれば、教会はその本質からして宣教的なのである。¹ それゆえ、私たちは、教会の使命が今ここで何を意味するのかを、現代においてあらためて見極める必要がある。外国人である私は、日本の状況について無数の盲点があることを痛感している。しかし、私のような外国人、外部からの観察者に与えられた洞察を提供する責任も感じている。今日は、キリスト教宣教の世界的な動向と、その学問分野としての宣教学について簡単に概観することを目的とする。この概観は、複雑で多面的な現実の表面を、せいぜいかすめるにすぎない。

信仰と学問のつながりや、社会における教会の役割といった要因は、キリスト教宣教がどのような状況や共同体においてどのように定義されるかを決定する。宣教学（英語では「Mission Studies」や「Missiology」の名でも知られる）は、教会にとって不可欠な学問分野である。なぜなら、忠実な証し・福音宣教は、行動と考察の組み合わせによって最もよく発展するからである。私たちは、神の委託に参加する際に用いられる動機、アプローチ、方法について、細心の注意を払って研究する必要がある。一つの目標は、宣教の実践をよりよく理解し、利用可能な最善の研究と情報に基づいてそれを改善できるようにすることである。宣教学のもう一つの、より深い目標は、聖書から新たな神学的洞察を生み出すことである。世界と宣教的に出会う教会であることの一部は、私たちが自らの神学を適切に実践するよう挑まれることである。

私の信念は、学術研究は、それ自体が目的であるのとは対照的に、宣教学的見地から教会に仕えるものであるべきだということである。学問は結局のところ、キリスト教宣教に奉仕するキリスト者の召命であり、実際、宣教の構成要素である。² 研究はまた、実際の宣教を行うための刺激や動機付けとして作用する。したがって、私たちは動向を研究し、歴史から学ぶ必要がある。もし私たちが核となる宣教の神学を見極めなければ、必然的に私たちはただ文化によって形作られるだけになってしまうだろう。私たちの文化的背景は、私たちがそれを十分に認識しているかどうかにかかわらず、常に我々を形作っている。しかし、キリスト者として私たちは、神の御言葉が我々の文化をどのように解釈するかを第一に形作るべきだと信じている。さらに、テキスト（聖書）、私たちのコンテクスト（文化）、そして教会の一部としての私たち自身の個人的な経験（信仰の旅路）の間のダイナミックな相互作用の中で、私たちの宣教に対する理解は形作られるのである。³

¹ これはスイスの改革派神学者エミール・ブルンナー『みことばと世界』（ニューヨーク：チャールズ・スクリブナーズ・サンズ、1931年）108頁からの引用である。しかし、この真理はプロテスタント界だけでなく、ローマ・カトリック界でも広く受け入れられている。例えば、第二バチカン公会議『教会の宣教活動に関するアド・ジェンテス教令』（1965年）<https://tinyurl.com/3wdxud7> 参照。

² ウォールズ、アンドリュー・F. 『学問、宣教、グローバリゼーション：アフリカにおけるキリスト教学者の召命についての考察』。Journal of African Christian Thought 9 (2) (2006), p. 37 参照。

³ この洞察については、ヴァン・エンゲン、チャールズに謝意を表したい。Charles van Engen, Transforming Mission Theology (Pasadena: William Carey Library, 2017), p. 25-27 参照。

本稿の第一部では、最近の歴史における世界的な動向とテーマに焦点を当て、最初は世界宣教の文脈で、その後は宣教学の分野に焦点を当てる。(a)宣教学固有の特徴、(b)関連分野とのつながり、(c)将来の可能性という3つの角度から、宣教学という学問を取り上げることが目的とする。最後に、日本の基督教に焦点を当てる。このような世界的な潮流は日本の教会にどのような影響を与え、その潮流は私たちにどのような対応を迫っているのか。日本の文脈における宣教学的研究の現在の意義と必要性は何か。本講演では、このような主な疑問に答えたい。

② 世界の基督教と宣教の現状

I. 教会を通しての神の宣教という観点から見た世界の動向

私たちはますます複雑化する世界に生きている。都市化、移民、難民危機、AI が操作する果てしない新しいデジタル技術の結果、文化的所属が変化している。こうした要因の結果、民族や言語の混在がより一般的になり、新たな共同体・集団や雑種のアイデンティティが生み出されている。⁴ 西側世界では、「表現的個人主義」(expressive individualism)が増大する中産階級によって推進され、現代を圧倒するかのようなアイデンティティの新たな探求が不安視されている。⁵

変化し続ける世界の動向を正確に予測することは、人々の信仰心という点でも不可能であることは、様々な形で明らかにされている。ピーター・バーガー(有名なアメリカの社会学者)は最近、20世紀後半に西洋で広まった世俗化理論は本質的に間違っていたと指摘した。実際、現在の調査では、1970年には世界人口の81%が宗教に属していたが、2050年には91%に増加する可能性が高いことが確認されている。⁶ バーガーは、(彼自身を含む)西洋の主要な社会学者が世俗性と多元性を混同していると主張している。

近代は必ずしも宗教の衰退をもたらすわけではなく、多元化の深化をもたらすのである。多元化とは、より多くの人々が競合する信念、価値観、ライフスタイルの中で生活するという、歴史的に前例のない状況である。このような状況は宗教に重大な影響を与えるが、それは世俗化の影響とは異なる。⁷

多元化が深まる中、世界の基督教はどうなっているのだろうか。世界の人口は2024年には82億人に達し、その約3分の1は基督教徒である。世界の基督教徒のほぼ3分の2は都市部に住んでいる。2080年には、世界全体で高齢者(65歳以上)が18歳未満の子どもを上回ると推定されている。一部の人口は、主に移民によって増加する。⁸ 20世紀後半、西洋が新たな宣

⁴ ローザンヌ世界委員会現状報告書(以下、ローザンヌ SGCR)、2024年、17頁参照。<https://lausanne.org/download-report> で入手可能。

⁵ ブライアン・ロスナー(2022)が説得力を持って論じているように、今日の個人のアイデンティティは(少なくともポストモダンの西洋において、しかし世界的な影響力を持つ)自己定義と自己表現がすべてである。人生における最高の目標が幸福であることを考えると、すべての道徳的判断は単なる感情や個人的嗜好の表現とみなされる。カナダの有名な哲学者チャールズ・テイラーは、「現代の自由と自律性は自分自身を中心に据えており、真正性の考え方は、自分自身のアイデンティティを発見し、明確にすることを求めている」と断言している。Charles Taylor, *The Ethics of Authenticity* (London: Harvard University Press, 1991), p. 81 参照。

⁶ Todd M. Johnson and Gina A. Zurlo. *World Christian Encyclopedia* (以下 WCE) (Edinburgh: Edinburgh University Press, 2020), p. 5 参照。

⁷ Peter L Berger, "Further thoughts on religion and modernity," *Society* 49 (4) (2012), p. 313 を引用。

⁸ 国連経済社会局人口部、2024年、1-5頁。入手可能 <https://population.un.org/wpp/>

教地となったことは明らかである。熱烈な無神論の波は、この現実を証明するものとなった。⁹ ポスト・キリスト教という文脈の中で、古代の精神性だけでなく、現代的な精神性にも目を奪われるような多様性を求める新たな動きが巻き起こった。しかし、多数派世界のキリスト教の隆盛は、こうしたプロセスに影を落とした。アフリカ、ラテンアメリカ、アジアの教会が欧米で急速に拡大し、宣教地が欧米の外にあるという考え方はまったく通用しなくなった。

キリスト者は、キリスト教の最新動向と、世界規模で約 45,000 の教派やグループに広がる教会を通じた神の使命について情報を得る必要がある。¹⁰ アジア、アフリカ、ラテンアメリカ、オセアニアなど、経済的に発展していないことが多い「グローバル・サウス」の国々では、社会の安全性や質の高い医療へのアクセスが平均以下であるため、今日の典型的なクリスチャンは非白人の女性である。おそらく裕福なヨーロッパ系白人男性であったであろう 100 年前の一般的なクリスチャンと比べると、この人物は大きく異なっている。¹¹ 地理的に言えば、今日、キリスト者の 33% はヨーロッパか北米に住んでいるが、67% はグローバル・サウスに住んでいる（2025 年には 77% に達すると予測されている）。この変化は、全キリスト教徒のわずか 18% がグローバル・サウスに住んでいた 1900 年以来、驚くべき増加である。

キリスト教そのものが、この巨大な人口移動によって変容しているのである。欧米のキリスト教徒は、他の地域で起こっているキリストへの大規模な動きに目をつぶり続けるのではなく、世界の教会を拡大する地域のキリスト教の能力を認識する必要がある。人々は急速に移動しており、グローバル・ノースは大きな恩恵を受けている。移民教会によって変容しつつある状況の一例として、2000 年以来 8 週間ごとに新しい教会が建てられているスコットランドがある。¹² 例えば、スコットランド自由教会では、エジンバラで初めて、そしておそらくスコットランド全土でも初めてのスペイン語を話す教会が最近誕生した。¹³ スコットランドの移民教会の 70% がアフリカ系であり、移民信徒の指導者の 70% が兼業であることは注目に値する。自由であろうと強制的であろうと、大きく世界中に移動したこのアフリカ人移民（他の多くの人々の中の一例として）は、彼らのホスピタリティ、交わり、霊性の価値観をどこに行こうとも持ち込んでいる。

キリスト者は「すべての民をわたしの弟子にしなさい」（マタイ 28:19）と主イエスに教えられている。近年劇的に増加している移住を通して、クリスチャンの移住者は新しい環境に福音をもたらし、クリスチャンでない移住者はすでにそこに住んでいるクリスチャンと出会うことができる。日本では、移民現象がますます定着しつつある。最新のデータによると、2024年6月末現在、日本の中長期在留外国人の数は、2023年12月から5.8%増の331万人となり、過去最高を記録した。¹⁴

神は散らされる人々の間で、また散らされる人々を通して、どのようにご自身を知られているのだろうか？これこそ、注意深い識別を必要とする神学的な深いテーマである。「移民への対応において教会が直面する選択は、その将来を決定する。教会は恐れをもって対応し、変化を脅威と

⁹ 無神論の波は、リチャード・ドーキンスの『神は妄想である』（2006年）、サム・ハリスの『キリスト教国への手紙』（2006年）、『信仰の終焉：宗教、テロと理性の未来』（2005年）などの著作によって広まった。

¹⁰ WCE、2020年参照。Gina A. Zurlo, *Global Christianity: A Guide to the World's Largest Religion from Afghanistan to Zimbabwe* (Zondervan 2022) も参照。

¹¹ WCE、2020年、3頁を参照。

¹² レポート全文は <https://tinyurl.com/53tbv4au> を参照。

¹³ <https://tinyurl.com/dp86ptr8> 参照。

¹⁴ 2024年10月18日付ジャパンタイムズ、フランシス・タン <https://tinyurl.com/2uncdzfu> を参照。

みなすこともできるし、移民の人々がもたらす宣教的で変革的な機会を認識することもできる」。¹⁵

II. ペンテコステ派／カリスマ派／福音主義教会の台頭

福音派は、ヨーロッパと北米における 18 世紀と 19 世紀のリバイバルの後、ダイナミックな勢力として出現した。北米は依然として福音派運動をリードしているが（特に財政的、組織的な中心地として）、福音派の大部分はグローバル・サウスの地域で着実に成長している。¹⁶

ペンテコステ派教会は、20 世紀初頭のリバイバルから生まれた。強力なペンテコステ／カリスマ信徒の働きは、特に癒しの奇跡や悪魔の力からの解放など、聖霊の働きに強い焦点を当てることが多い。カリスマ派とペンテコステ派は、基本的に信仰と教義において福音主義的である。グローバル・サウスでは、欧米で通常行われているように、彼らは個別に分類されることはない。彼らの信仰は、単なる神学的知識や一連の教義ではなく、生きた活発なものであり、生活と奉仕の勢力を生み出すのに十分な力を持つ。ペンテコステ派の教会は、中国、インド、スーダン、エチオピア、ベトナム、ミャンマー、ネパール、モンゴル、そしてイランでも成長している。教会の最も注目すべき成長のいくつかは、迫害が日常生活の一部である・あった国々で起こっていることは注目に値する。

ペンテコステ／カリスマ・キリスト者は、1900 年には 100 万人に満たなかったが、2050 年には 10 億人に増え、その大部分はアフリカ出身である。実際、1900 年にはわずか 1.7% だったクリスチャン全体の 39% が、2050 年にはアフリカに住むようになるだろう。今日、ナイジェリアでは、日曜日の朝に礼拝する英国聖公会の信者の数がイギリスを上回っている。しかし、サヘル地域（サハラ砂漠とサバンナ地域に挟まれた北中央アフリカの半乾燥地域）や中東では、状況はまったく異なるようだ。1900 年には、中東の人々の 13% がキリスト教徒だった。2020 年には、キリスト教徒はわずか 4% に過ぎない。¹⁷

III. 真に世界的な教会が再興し、グローバルな協力が増加する

キリスト教があらゆる国に、そして多くの民族の間に存在することは、キリスト教を純粋に世界的な宗教にしている。しかし、世界の北と南におけるキリスト教生活には、性別、健康状態、経済状態の面で格差が存在し続けている。キリスト教が後発開発途上地域に広がっていることは、聖書の解釈の違いだけでなく、信者が神と出会う方法にも明確な違いがあることを示唆している。

宣教は、相互的な変革の双方向性を促進する代わりに、キリスト教信仰の特定の形式や表現を一方的に輸出することで成り立っていることがあまりにも多い。それでも、キリスト教宣教は現在、あらゆる場所からあらゆる場所へと行われている。「ポリセントリック・ミッション」は、世界宣教に言及する際に頻繁に使われる新しい流行語の一つである。¹⁸ 使徒言行録 11 章 19 節から 26

¹⁵ Jenny Hwang Yang, "Immigrants in the USA: A Missional Opportunity," Global Diasporas and Mission, eds. Chandler H. Im and Amos Yong (Regnum Edinburgh Centenary Series, Oxford UK: Regnum Books International, 2014), p. 157 参照。また、Masanori Kurasawa, "Japan Missions: The Potential of the Christian Diaspora," Christ and the World: Bulletin of Tokyo Christian University 26 (2016), pp. 1-14 も参照。

¹⁶ ローザンヌ SGCR 2024 年、12-13 頁を参照。

¹⁷ WCE、2020 年、5 頁を参照。

¹⁸ Allen Yeh. Polycentric missiology: 21st-century mission from everyone to everywhere (InterVarsity Press, 2016) 参照。また、「ポリセントリック・キリスト教とは何か」と題された記事 (<https://lausanne.org/report/polycentric-christianity/rise-of-asia>) も参照。

節が端的に説明しているように、実際には、キリスト教宣教は最初から多方向的（ポリセントリック）であった。今日、「送り手」と「受け手」の間の力の不均衡は、1800年代以降、西洋から流れた近代宣教運動の時代ほど顕著ではない。50年前よりも多くの宣教師が世界のあらゆる地域（ヨーロッパを除く）で派遣され、受け入れられている。にもかかわらず、未伝道民は世界人口の40%を占めているにもかかわらず、世界の宣教師の4%未満しか未伝道民に関わっていない。¹⁹ 宣教師が手を差し伸べようとしている人々の種類において、このような対照的な状況は、現代の宣教学におけるジレンマを浮き彫りにしている。

このような困難にもかかわらず、キリスト教は最もグローバルな宗教となった。キリスト教の証しや土着の信者の交わりのない国はない。しかし、場合によっては、イエス・キリストを信じる信者は秘密主義を貫かなければならない。クリスチャン人口が1%未満の国は14カ国あり、5%未満の国も23カ国ある。世界のほとんどの人々は、現在の翻訳プロジェクトが完了し次第、聖書にある程度アクセスできるようになるか、少なくともアクセスできるようになる見込みがある。

ブラジル、フィリピン、韓国、ナイジェリアなどでは最近、宣教師の派遣が増えている。外国人宣教師を最も多く送り出しているのは依然としてアメリカであり、ブラジルと韓国がそれに続いている。1990年、韓国の教会は550人の宣教師を送り出したが、その後の20年間でその数は25,000人に増え、176カ国で活動している。²⁰ また、モンゴル、カンボジア、ベトナム、スリランカ、タイ、さらにはチベットでの小規模な運動など、仏教世界の政治的危機にもかかわらず、キリスト教の成長は著しい。

世界レベルでの教会の協力は、今、新たな方法で形作られている。2010年には、先駆的な1910年のエジンバラ世界宣教会議を記念する集会がいくつか開催された。福音派にとって最も注目すべきは、南アフリカ（ケープタウン）で開催された第3回ローザンヌ会議（2010年）である。2024年には第4回ローザンヌ世界宣教会議が韓国で開催され（2024年）、200カ国以上から5,400人の信者が集まり、議論、祈り、礼拝、そして新たな協力のための1週間を過ごした。²¹

ローザンヌ大会で発表された聖書の教えは、特定のグループや教派に正確に沿ったものではなかった。しかし、ローザンヌ運動の宣教の重点分野の多くは、デジタル時代における宣教、迫害される教会との連帯、移民の影響など、世界的な教会のそれと類似している。また、（特にボストンのゴードン・コンウェル神学校を拠点とする）グローバル・キリスト教研究センターでは、世界中のキリスト教女性の働きに改めて焦点が当てられている。女性は世界のほとんどの国で教会員の大半

¹⁹ 「未伝道民」とは、自国民に伝道できる固有の教会を持たない人々のグループを指す。ローザンヌ SGCR 2024年、14-15頁を参照。Bartlotti, Leonard N. *People Vision: Reimagining Mission to Least Reached Peoples*, 2024 参照。本書は、21世紀におけるピープル・グループ・パラダイムの重要性を浮き彫りにし、この概念の水準点となる研究書である。本書は、聖書、対話、祈り、そして教会・宣教のリーダーや現場で働く人々のケーススタディを通して、ピープル・グループ宣教学の理解を、多数派の世界の視点から再検討している。

²⁰ Sang-Bok David Kim, "Changes and Trends in World Christianity," *Transformation* 30(4) (2013), p. 8 参照。

²¹ スイス・ローザンヌで開催された「第一回ローザンヌ世界宣教会議」（1974年）に端を発するローザンヌ運動は、2024年で50周年を迎えました。世界のプロテスタント福音派の一致と世界宣教協力を目当てに今日に至っています。そして、日本の福音的な諸教会の結集と宣教協力もこのローザンヌ運動と共に歩んで来ました。個人的には、さまざまな理由からこの会議に直接参加することに価値と刺激を感じたが、私は批判的連帯の立場からそうしており、したがって、グローバル・サウスからの捕らえがたい声にも共感している（ジェイ・マテンガ <https://jaymatenga.com/14-reflections/> 参照）。その他の様々なレビューについては、<https://tinyurl.com/3v6uw7tp>、また Joseph W. Handley Jr "Reflections on the Fourth Lausanne Congress," *Evangelical Review of Theology* 48(4) (2024) を参照。

を占めており、キリスト教信仰が将来にわたって継続するために不可欠な存在である。²²

IV. 包括的宣教／ホリスティック・ミッションが広く受け入れられ、実施されている

1980年代から1990年代にかけて、世界各地で援助、開発、慈善活動が活発化し、21世紀に入ってからその勢いを増している。市民セクター（NGO）を通して、最も弱い立場にあり、困窮している人々のニーズがこれまで以上に組み込まれている。²³ それに伴い、20世紀後半には多くの教会や宣教団体の間で、福音的宣教に対するより全体的な理解が深まった。虐げられた人々に正義と自由をもたらす宣教は、神の心、聖書の価値観、そして教会の役割を反映している。

福音主義側では、ローザンヌ誓約（1974年）、ケープタウン公約（2010年）、そして最近のソウル声明（2024年）が、伝道（言葉で宣言）と社会的責任（行動で示す）の不可分の結合を支持している。²⁴ エキュメニカルな面では、同じ真理が世界教会協議会（WCC）の『生に向かって共に』（2013年）の宣言によって確認されている。『言葉と行いを通して、そしてその存在そのものにおいて、教会は来るべき神の支配のビジョンを予見し、証しする』。²⁵ 言葉による宣言と具体的実証は、同じ福音の「鳥」の両翼である。

③ キリスト教宣教の学問的研究における現在の発展

I. 研究分野としての宣教学の特徴

ここ数十年、宣教学はミッション・スタディーズとも呼ばれるようになった。²⁶ 宣教学という学問分野には、さまざまなアプローチがある。一部の宣教学者にとって、宣教学は教会の宣教使命を果たすために社会科学を活用することに主眼を置いている。また、南アフリカの宣教学者デイヴィット・ボッシュの歴史神学的アプローチが高く評価されている者もいる。彼の代表的著作である『宣教のパラダイム転換』（1991年）は、少なくとも15ヶ国語に翻訳され、数え切れないほどの文脈で用いられている。

宣教学の境界線はどこにあるのか、ミッション研究には何が含まれるべきなのか。学際的な試みとしての宣教学は、キリスト教宣教というトピックを調査するために様々な観点をを用いている。宣教学は聖書学・神学、歴史学、そして様々なタイプの社会科学という3つの主要なカテゴリーに分類することができる。この点については、学者たちの間で大方の合意が得られているようである。最近出版された『オックスフォード宣教学教科書』（2022年）では、著者の半数が多数派世界の出身者であり、宗教と文化に関連する社会科学が最も注目されている。この教科書は、宣教学と社会

²² Gina Zurlo, *Women in World Christianity: Building and Sustaining a Global Movement* (Wiley-Blackwell, 2023) を参照。

²³ ワールド・ビジョン、ワールド・リリーフ、ティアファンド、フード・フォー・ザ・ハングリー、コンパッションなどの宣教団体やその他何百もの団体が、オックスファム、ケア・インターナショナルなどの世俗的なNGOや国連と協力して、救済や開発活動を行っている。宗教団体と非宗教団体は、人類の繁栄のために協力している。

²⁴ <https://lausanne.org/statement/the-seoul-statement> を参照。

²⁵ このWCC宣誓文は、世界宣教・伝道委員会（Commission on World Mission and Evangelization）によって作成された。以下から入手できる、<https://tinyurl.com/mmpan2d> これらの文書には、世界宣教と福音主義の声の収束の兆しが見取れる。また、Kenneth R. Ross, *Mission rediscovered: transforming disciples: a commentary on the Arusha call to discipleship* (Globethics.net, 2020) 参照。正教会、プロテスタント、カトリック、聖公会、独立派、福音派、ペンテコステ派のキリスト教表現が集まったプロセスの産物としての「弟子へのアルーシャ・コール」である。

²⁶ Kim, Kirsteen, Knud Jørgensen, and Alison Fitchett-Climenhaga, eds. *The Oxford handbook of mission studies* (Oxford University Press, 2022) 参照。

科学の関係を建設的に照らしており、そのため生態学、人口統計学、女性、移民、人種に関する章が含まれている。

過去数世紀にわたり、宣教学は他の学問分野にも影響を与えてきた。その焦点は教会の外にあり、キリスト教と現代のさまざまな状況との関わりを記録しているからである。例えば、初期の人類学者や民族学者の多くは宣教師であり、彼らが仕える人々に熱心に注意を払っていた。²⁷ さらに、聖書の翻訳と福音伝達に関する考察は、翻訳と異文化間接触への関心を呼び起こした。²⁸

II. 関連分野

神学における古典的な4つの学問分野には通常、聖書神学、歴史神学、組織神学、実践神学が含まれる。実践神学が宣教学と密接に結びついていることを強調するため、最後に挙げた学問分野にはしばしば実践神学や宣教学という名称が付けられる。キリスト教宣教は、多数派世界の数多くの地域において、社会変革や正義のための効果的な擁護方法に関する研究を刺激してきた。²⁹

20世紀半ば以降の国際開発に関する研究もまた、西欧の植民地で保健、教育、さまざまなサービスを提供した宣教師の目的と実践を大いに参考にしている。こうした宣教師の実践は、ある種の北欧の国教会やそれ以後の教会におけるディアコニア(=愛のわざ・愛の奉仕)の神学的枠組みと一致していた。この点で、神の使命の一部として、また神の使命に奉仕する教会の次の諸側面の間には、非常に密接なつながりがあることを改めて強調しておく必要がある、すなわち礼拝(レイトゥルギア)、宣言(ケリュグマ)、交わり(コイノーニア)、仕えること(ディアコニア)である。³⁰

学術的に言えば、ここ数十年の間に、宣教学と密接に関連する「世界キリスト教」と「異文化間神学」という2つの分野が出現した。以下、順番に簡単に紹介する。

A) グローバルキリスト教・世界キリスト教という分野

「世界キリスト教」の研究は、主にブライアン・スタンレー、ラミン・サンネ、ダナ・ロバート、アンドリュー・ウォールズをはじめとする一流の宣教史研究者によって進められてきた。³¹

²⁷ K. Lauterbach, "Mission and the anthropology of Christianity," in *The Oxford Handbook of Mission Studies*, eds. K. Kim, K. Jørgensen and A. Fitchett Climenhaga A (Oxford: Oxford University Press, 2022), pp. 403-419 参照。

²⁸ L. Sanneh, *Translating the Message: The Missionary Impact on Culture* (2nd edition Maryknoll, NY: Orbis, 2009) 参照。

²⁹ 例えば、J. Burity, "Christian mission and social sciences: a Latin American view." in *The Oxford Handbook of Mission Studies*, eds. K. Kim, K. Jørgensen and A. Fitchett Climenhaga A (Oxford: Oxford University Press, 2022), pp. 617-634 を参照。

³⁰ K. Jørgensen, "Biblical perspectives on kerygma and diakonia," *Evangelism and Diakonia in context* (2016), pp. 7-18 参照。

また、宣教とディアコニアとの関係については、Benjamin L. Hartley, "Diakonia and Mission: Charting the Ambiguity" (2016), p. 53 を参照。入手可能 <https://tinyurl.com/3zr8fyp3>。

³¹ 例えば、Walls, Andrew F. *Missionary movement in Christian history: Studies in the transmission of faith*. Orbis Books, 2015; Walls, Andrew F. *Cross-Cultural Process: Studies in Transmission and Reception of Faith*. Bloomsbury Publishing, 2002; Sanneh, Lamin. *Whose religion is Christianity?: The gospel beyond the West*. Wm. B. Eerdmans Publishing, 2003 を参照。また、Robert Dana L. (2021), *World Christianity as a revitalization movement*. In: Hanciles JJ (ed) *World Christianity: Histories, Methodologies, Horizons*. Maryknoll, NY: Orbis, 3-22 を参照。その他の重要な著作には以下のものがある、Jenkins, Philip. *The next Christendom: The coming of global Christianity*. OUP USA, 2011; Jenkins, Philip. *The New Faces of Christianity: Believing the Bible in the Global South*. Oxford University Press, 2006.; また Escobar, Samuel. *The new global mission: The Gospel*

1990年代以降のこの発展は、キリスト教がヨーロッパ中心の宗教であるという支配的な認識に異議を唱えるものであり、包括的な意味での世界宗教としての地位を示している。³² 発展途上の学問分野としての世界キリスト教は、キリスト教研究において西洋中心から脱却するために存在する。³³ この学問は、現代世界において不可欠な宣教実践の再確立につながる、必要な植民地時代後の宣教批判を提示している。

本稿の第一部で述べたように、キリスト教はポスト西洋の信仰としてますます台頭しており、西洋はキリスト教の崩壊後、世界で最も急速に成長した宣教地となっている。³⁴ このような動きは、世界的に神学教育に深い影響を与え続けている。本稿は、神学教育と教会宣教をそれに合わせて調整するために、こうした動きを建設的に考察する試みである。

B) 異文化間神学 / 異文化研究という分野

「異文化研究」や「インターカルチュラル・スタディーズ」と呼ばれるもう一つの発展途上の研究分野も同様に、ポストコロニアル期における欧米における「宣教」という用語にまつわる否定的な意味合いに取り組んでいる。このような反応は、宣教という概念が、ヨーロッパ植民地主義の軽蔑や恐怖と結びついていることに起因している。20世紀半ばからアフリカ文学の中で広まったキリスト教宣教批判によれば、多くの宣教師は「ヨーロッパの植民者の召使い」であった。³⁵

欧米の学界では、世界／グローバル・キリスト教や異文化間神学といった研究分野が急速に発展している。その結果、学問分野としての宣教学は、しばしばこれらの代替的なアプローチに取って代わられる危険にさらされている。この発展に関して、キルスティン・キムの警告の姿勢は的確かつ時宜を得たものである。

しかし、どちらも宣教学に取って代わることはできても、宣教の実践を統合的テーマとしているわけではないので、これらの分野はますます宣教学から乖離していく可能性がある。アカデミーの中で発展するにつれて、それぞれが従来宣教学が扱ってきたテーマを軽視するようになるかもしれない。両者とも、キリスト教の諸形態とその相互関係に気を取られ、例えば、意図的な伝道運動、奉仕／ディアコニアとしての宣教、未伝道者への到達、キリスト教生活に不可欠なものとしての宣教、他宗教との関係における教会、弁証論などを扱えなくなる可能性がある。³⁶

キムの観察は、宣教が世界中の教会の焦点であることを思い出させる重要なものだ。宣教は西側の教会だけに属する特別な賜物ではない。その結果、宣教学は実に世界的で多次元を持つ学問

from everywhere to everyone. InterVarsity Press, 2003 も参照。

³² Kim S. and Kim K, *Christianity as a World Religion*, 2nd ed (London: Bloomsbury, 2016) を参照。

³³ E. Wild-Wood, C.F. Cardoza-Orlandi and D. Daugherty, "World Christianity: history, conception, and interpretation," in *World Christianity: Histories, Methodologies, Horizons*, ed. J.J. Hanciles JJ (Maryknoll, NY: Orbis, 2021), pp. 23-43 参照。

³⁴ イライジャ・キムとその近著『*The Rise of the Global South: The Decline of Western Christendom and The Rise of Majority World Christianity*』(2012年)ほど、このことを注意深く記録している者はいないである。

³⁵ クウィヤニ氏は、植民地化とキリスト教化を同時に行うという無意味な考えに強く反対しているが、過去数世紀にわたってそれが現実となってきた。「私は、西洋の宣教団体がいまだに文明化を目指していることを知っている。文明化の使命という考えは続いている。。。彼ら(欧米の宣教師)は、学校を建てたり、病院を運営したり、英語を教えたり、あるいはそのようなことができるようになったときのみ繁栄するのです」。<https://tinyurl.com/ys94sfbe>) ベティ、モンゴの小説も参照のこと。『*ボンバの貧しいキリスト*』。ブルームズベリー出版、2024年。

³⁶ Kirsteen Kim, "The future of mission studies," *Transformation* 41(3) (2024), p. 219. を引用。

分野なのである。制限的なヨーロッパの規範概念から脱却しようと苦闘している西洋神学にとって、いくつかの世界宗教が前面に押し出している問題を解決するには、まだやるべきことがたくさんある。³⁷ 宣教学が極めて重要なのは、それなしには教会の神学とその多様な宣教実践を批判的に吟味することができないからである。さらに、ポストコロニアル時代において、新鮮で適切な宣教の表現を開発する必要があるからである。

ある文脈では、学位プログラムの用語を「宣教学」から「異文化研究」に変えることは、安全保障のために必要なことである。より広いレベルでは、宣教学が古典的な神学研究分野とどのように相互作用しているかという「虻」的役割を認識する必要がある。宣教学の役割は、アンドリュー・ウォールズによって顕著に明らかにされている。

宣教学者は学問界の虻である。彼らは隣人の学問的領域に侵入し、彼らの話題を盗む。私たちは宣教学という名の下に、聖書的分野、神学的分野、歴史的分野、そして実践的分野に侵入する。神学者、聖書学者、教会史家、実践神学者が、自分たちの任務の宣教学的側面に注意を払っていれば、私たちは必要とされない。つまり、実際には、宣教学者は自発的に皆の洗濯を引き受けているのである。³⁸

ここで紹介した新しい関連学問分野の中で、宣教学がどのような位置づけにあり、どのような必然性があるのかという問題に関して、私は次のような予備的結論を簡単に出している。結局のところ、宣教学は、異文化間神学と世界キリスト教という双子の分野を凌駕するものであり、それらは基本的に、ヨーロッパの言葉で表現されたヨーロッパのジレンマを解決するために存在している。³⁹ ここで、キリスト教宣教、教会、聖書神学がどのように関連しているのかという問題に簡単に目を向けよう。

④ 宣教学の現状と将来の可能性

I. 宣教・教会・神の国の神学

キリスト教の使命は、聖書に啓示された三位一体の神から流れ出るものであり、聖霊を通して主イエス・キリストにおける父なる神の使命に私たちが参加することを含む (*missio Trinitas*)。

⁴⁰ この使命は、証し、伝道、奉仕、弟子訓練など、さまざまな用語や実践を通して具体的に説明す

³⁷ アンドリュー・ウォールズは、「問題は、啓蒙主義の神学は、リベラルな神学と同様に保守的な神学でもあり、小規模な宇宙のための神学であるということだ。世界のほとんどの人々は、啓蒙主義が許容するよりも大きく、より人口の多い宇宙に住んでおり、経験的世界と精神の世界の間には、常にどちらかの方向に横断される、永久に開かれたフロンティアがある。つまり、西洋の神学、啓蒙主義の神学は、アフリカやアジアにとっては小さすぎるのだ…疑問がないから答えがないのだ…だから、新しい時代の教会と学問は、古い時代の教会がここ数世紀に用いてきたものよりも大きな宇宙のための神学を発展させなければならない。」Andrew F. Walls *The Missionary Movement from the West: A Biography from Birth to Old Age*. Wm. B. Eerdmans Publishing, 2023, p. 238 を参照。また、Kim K (2022) *Globalisation after empires*. In: Ziegler PG (ed.) *Edinburgh Critical History of Christian Theology*, vol. 6: Twentieth Century. Edinburgh: Edinburgh University Press, pp. 262-276 も参照。

³⁸ Andrew F. Walls, *Crossing Cultural Frontiers: Studies in the History of World Christianity*. (Maryknoll, NY: Orbis, 2017), p. 259 参照。

³⁹ Ustorf W (2011) *The cultural origins of "intercultural" theology*. In: Cartledge MJ and Cheetham D (eds) *Intercultural Theology: Approaches and Themes*. London: SCM, 11-28 参照。

⁴⁰ クリストファー・ライトの宣教の定義はとても参考になる、「宣教とは、聖書の用語で言えば、私たちが計画や行動に参加することは避けられないが、主として私たちの活動や主導権の問題ではない。私たち人間の努力から見た使命とは、被造物全体の贖いという神の目的に、神の民が献身的に参加することを意味する。」Wright, Christopher JH. *The mission of God: Unlocking the Bible's grand narrative*. Inter-Varsity Press, 2006, P.67 を参照。また、三位一体的な宣教理解については、Cronshaw, Darren. "Missio Dei is missio trinitas: Sharing the whole life of God, father, son

ることができる。英語では、単数形の「mission」は複数形の「missions」とは別のものを指すことがある（特に北米の文脈では）。簡単に言えば、宣教活動（missions）とは、神の被造物の贖い（救い）という、神の唯一無二の全体的使命(mission)に参加するために、組織、教会、個人が計画的、協動的に行うキリスト教的活動のことである。

神の使命は、天地創造からキリストの究極的な再臨に至るまで、あらゆる国民、あらゆる部族、あらゆる民族、あらゆる言語から無数の群衆が小羊の前に現れる時まで及ぶ。実際、「救いは、玉座に座っておられるわたしたちの神と小羊とのものである」（黙示録 7:9）。私たちは教会として、神の使命に参加するよう召されているに過ぎない。したがって、マタイ 24:14 はゴールではなく、むしろ約束なのだ。「そして、御国のこの福音はあらゆる民への証しとして、全世界に宣べ伝えられる。それから、終わりが来る」。神は人間の代理を用いるが、人間の参加者が神の目的を早めることはできない。

宣教の第一の焦点は、神の差し迫った御国の実現に向けた教会の活動である。私たちの出発点は、主イエス・キリストが弟子たちに命じておられることは何でも、この世で行うことである。聖書の4つの福音書の最後（マタ 28:16-20、マリア 16:15-20、ルカ 24:46-49、ヨハ 20:19-23）と使徒 1:8 で、イエスは弟子たちに、ご自分の使命の役割を果たすよう呼びかけている。キリスト者として、私たちはこの使命を忠実かつ責任を持って果たすよう召されているキリストに従おうとしている。私たちは、弟子を作り、福音を伝え、証をし、キリストの教えを実行に移すために、どのようにしたらよいかを祈りながら考える。

預言的なビジョンは、今日の世界に対する私たちキリスト者の関わりと、隣人を自分のように愛する忠実な奉仕者によって具現化される神の国への参加の基礎となる。教会はそれ自体が存在の最終目標ではないので、この御国への焦点は不可欠である。むしろ、教会は神の国のために存在するのである。⁴¹ ユルゲン・モルトマンが主張するように、「キリスト教は、その本質と目標をそれ自体に持っているのでも、それ自体の存在に持っているのでもなく、それ自体をはるかに超えたところにある何かから生き、その何かのために存在している」のである。そして教会は、この「終末論的希望の地平」によって変容するのである。⁴²

ヨハネス・ホーケンダイクは、教会そのものではなく、教会の使命（「外側」）に集中することで、教会の根本的な本質（「内側」）が明らかになると主張した。⁴³教会は根本的な意味で「外向き」である。他の多くのプロテスタント（改革派の代表的な神学者を含む）の神学者たちは、教会の召命は神の国の「しるし、前触れ、道具」であると見ている。⁴⁴

and spirit.” *Mission Studies* 37, no. 1 (2020): 119-141 参照。

⁴¹ Newbigin, L. *Sign of the Kingdom*, Eerdmans, 1981, p.4 を参照。

⁴² Moltmann, Jürgen. *Theology of hope: On the ground and the implications of a Christian eschatology*. Fortress Press, 1993, p.325 参照。また、Moltmann, Jürgen, and Margaret Kohl. *The coming of God: Christian eschatology*. Fortress Press, 2004 も参照。

⁴³ 「教会は使徒職の機能であり…その存在の根拠が御国を世に宣べ伝えることにありと知っている教会は、宣教に従事するのではなく、教会自身が宣教となり、世に対する神の生きた働きかけとなるのである。」Hoekendijk, Johannes Christiaan. “The church inside out.”, tr. Rottenberg, Isaac C. (1964), The Westminster Press, Philadelphia, p.40 からの引用。この気づきが、ホーケンダイクの神学的批判の核心である教会中心主義を生み出した。教会は、自らの教会文化に主眼を置き、その過程で教会の境界の壁の外にある聖霊の働きを軽視してはならない。むしろ教会は、自らの境界を超えた救いの目的に奉仕するダイナミックな信仰共同体なのである。

⁴⁴ Guder, Darrell L. 2015. *Called to Witness: Doing Missional Theology*. Grand Rapids, Michigan: Wm. B. Eerdmans Publishing, pp. 54-55, 74 参照。市川康則、「神の国」の視座における宣教の神学—改革派神学の一課題とし

世に対する教会の使徒的な方向性は、主との交わり、そして教会員同士の交わりの中にある共同体としてのアイデンティティに基づくべきである。そうすれば、教会は前触れとなり、言い換えれば、「神の目的の初穂、新しい人間性の実験園」となる。⁴⁵ 日本キリスト改革派教会創立 80 周年に向けた現在のプロセスに大いに期待している。(現在作成中の) 記念宣言のテーマである「神の国」に意図的に焦点を当てたことは、希望に満ちた建設的なものであると思う。主題を「『神の国を、今ここに』告白教会として生きる」とすること。この焦点は、RCJ の礼拝、教理的基盤、そして信徒の良き生活としての証しが、神の平和の造り手として、その宣教的・執事的 (ディアコニア) 意図をもって、より広い日本社会にどのように奉仕できるかを問うことによって、RCJ に目的意識をもって外へと方向づけるものとなるように。

II. 重要なテーマとしての ミシオ・デイ (*missio Dei*)

キリスト教の宣教は、しばしば *ミシオ・デイ* (*missio Dei*) という言葉でも定義される。このラテン語の用語は、創世記から黙示録に至る宣教の視点を含む神の派遣の意図を明らかにし、「予告」の福音 (ガラ 3:8) となる神の目的ある創造とその契約の約束 (創世記 12:1-3 他) を明らかにする。これらの約束は、キリストにおいて究極的な成就を見だし、新しい創造という終末論的希望を見いだす。⁴⁶

クリストファー・ライトは、「宣教の解釈学は、聖書全体が、神の被造物全体のために神の言葉と関わる神の民を通して、神の宣教の物語を私たちに伝えるという仮定から進む」と述べている。⁴⁷ 言い換えれば、宣教神学は聖書の一節に基づくものではない。そのようなアプローチはあまりにも狭く、聖書全体を貫く宣教学の糸の豊かさを見逃してしまうだろう。

キリスト者がさまざまな文脈で聖書に接するとき、*ミシオ・デイ* についての新たな理解が生まれる。⁴⁸ 私たちの使命は神の使命から派生したものであり、神の使命には、派遣という側面だけでなく、もっと豊かな考え方が含まれている。パウロがエフェソ 1:9-10 で要約しているように、宣教の中心は、キリストの主権を通して表される神の支配である、「あらゆるものが、頭であるキリストのもとに一つにまとめられます」。

宣教の神学は、西洋では何世紀にもわたって発展してきた。例えば、初代教父アウグスティ

て一(第 I, II, III 部)」、『改革派神学』第 27 号、2000 年；第 26 号、1999 年；第 24 号、1997 年も参照。

⁴⁵ Berkhof, Hendrikus. 1990. *Christian Faith: An Introduction to the Study of the Faith*. Rev. ed., Repr. Grand Rapids, Michigan: Eerdmans, p. 418-419 からの引用。

⁴⁶ 神の宣教は、しばしば一つの聖書テキスト、すなわちマタイによる福音書 28 章 18-20 節にのみ結びつけられている、大宣教命令の成就以上のものを伴うことに、特に注意することが重要である。「マタイの福音書からこれらの言葉を持ち出して、それ自体の生命を認め、最初に登場した文脈を全く参照せずに理解することは許されない」。David Bosch. *Transforming Mission: Paradigm Shifts in Theology of Mission* (New York: Orbis, 1991), 57 による引用。クリストファー・ライト (2006: 60-61) の洞察はここでも不可欠である。「宣教的解釈学は、単に大宣教命令への服従を求めるだけでは満足せず (それは譲れない重要事項として含まれることは確かだが)、大戒の宣教的意味合いについて考察するだけでもない。なぜなら、その両方の背後には、神のアイデンティティー、世界における神の働き、すべての被造物に対する神の救いの目的の啓示である「大いなるコミュニケーション」があるからである。そして、このコミュニケーションを完全なものにするためには、あらゆる部分とジャンルの聖書全体が必要である。」また、*ミシオ・デイ* の思慮深い要約については、Wright 2006: 62-63 も参照。岩崎謙 (翻訳)、「世のために、神によって選ばれた一聖書物語における宣教する教会」マイケル W. ゴーヒン、『改革派神学』第 35 号、2008 年も参照。

⁴⁷ Wright 2006: 122 参照。

⁴⁸ Daryl Balia, and Kirsteen Kim, *Witnessing to Christ Today, Edinburgh 2010*, vol. 2 (Oxford: Regnum, 2010), p. 23 参照。

ヌス (354-430CE) は、「教会と信徒が参加する神の御業」の説明としてミシオ・デイという言葉を使ったとされている。⁴⁹ 1920年代から1930年代にかけて、カール・ハーテンシュタインとカール・バルトは、ミシオ・デイの概念が三位一体の教理とどのように関連しているかを示した。⁵⁰ 1952年以降（ドイツのウィリンゲンで開催された世界宣教会議で）、ミシオ・デイの概念は神学においてより一般的な言葉となり、それ以来その影響力は拡大している。⁵¹

ミシオ・デイの解釈は、その解釈と適用が多様であるため、継続的かつ挑戦的な取り組みである。⁵² この（専門用語の）弾力性は、神の本質が変わることを意味するのではなく、三位一体の神の使命に対する私たちの理解が、今日の世界における神の救済の意図について学ぶにつれて変化し、適応していくことを意味する。今日、世界の教会では、キリスト教の宣教は、特定の任務（教会を建てる）や特定の目標（改宗者を作る）ではなく、神の使命（ミシオ・デイ）に軸足を置くものであるという、20世紀に発展した強いコンセンサスが存在する。⁵³

教会間のエキュメニカルな関係は、1910年にエジンバラで開催された第1回世界宣教会議に大きな影響を受けた。⁵⁴ しかし、この会議は「十字軍モード」を象徴するものであり、一部の宣教師たちは植民地キリスト教政府と手を組み、神の使命を軍事征服になぞらえ、それに伴う領土の拡大を目指した。キリスト教は優れていると考えられ、民族全体を「キリスト教化」することが目標とされた。宣教の代表者たちは、キリスト教の名の下に征服し、強制し、破壊した。⁵⁵

エジンバラ会議からわずか4年の間に、第一次世界大戦(1914~1918年)、世界大恐慌(1929~1933年)、第二次世界大戦(1939~1945年)といった世界的な大事件が起こり、楽観的な空気はたちまち崩壊した。これらの出来事は、福音に対する信頼に壊滅的な影響を与え、楽観的な宣教のレトリックに疑問を投げかけたからである、

- ヨーロッパ帝国の崩壊は、植民地主義の影響力の大幅な喪失を意味した；
- 啓蒙主義から生じた過信は根拠のないものだった-人類は「世界を変える」ことができると思い込んでいた⁵⁶ ；
- 西側のキリスト教指導者たちは、教会がヨーロッパよりも西側以外で急速に成長していることに気づいた。
- より謙虚な宣教へのアプローチは、罪深い人間の状態の墮落と神からの分離を認識する

⁴⁹ Thomas Kemper, "The Missio Dei in Contemporary Context," *International Bulletin of Missionary Research* 38, no. 4 (2014), p. 188 参照。

⁵⁰ 教会は、父、子、聖霊に従うという深い共同体を通して、三位一体の中で生きている。教会は共同体であるが、それは共同体のためではなく、神の使命に参加するためである。神と神の使命 (*missio Dei*) は本質的に関係的で共同体的であり、したがって教会 (*missio ecclesiae*) にも同じことが言える。

⁵¹ Kemper, 188 参照。

⁵² Gary Tyra, *A Missional Orthodoxy: Theology and Ministry in a Post-Christian Context* (Downers Grove: IVP Academic, 2013). 310. Andrew Walls, "Afterword: Christian Mission in a Five Hundred Year Context," in *Mission in the 21st Century*, ed. Andrew Walls and Cathy Ross (Maryknoll: Orbis Books, 2008) 参照。

⁵³ Sunquist, Scott W. *Understanding Christian mission: Participation in suffering and glory*. Baker Academic, 2013, pp. xi-xiv を参照。

⁵⁴ Thomas NE (2010). *Missions and Unity: Lessons from History, 1792-2010*. Eugene, OR: Wipf and Stock 参照。

⁵⁵ Michael Stroope, *Transcending Mission: The Eclipse of a Modern Tradition* (London: Apollos, 2017), p. xiv 参照。

⁵⁶ Keith Whitfield, "The Triune God: The God of Mission," in *Theology and Practice of Mission: God, the Church, and the Nations*, ed. Bruce R. Ashford (Nashville: B&H Publishing Group, 2011), p. 18 参照。

ことによって特徴付けられた。⁵⁷

第二次世界大戦後の（プロテスタント）国際宣教協議会の宣教姿勢は、教会の使命は「十字架の下」に属するというのを改めて反映していた。

過去の勝利至上主義的な態度を悔い改め、キリストご自身のように、教会の使命は力の中ではなく弱さの中にあること（2 コリント 12:9）、キリストの道は勝利の前に苦しみを通してあること（ローマ 6:4）が認識された。そのため、受肉（フィリピ 2:5-11）の犠牲的で自己犠牲的な性質が再認識された。⁵⁸

III. 宣教的教会運動（Missional Church Movement）と日本におけるその可能性

改革派の伝統は、その神学と実際の宣教活動の両方において、世界的なキリスト教運動の構成要素としての強い宣教的推進力を維持している。16世紀の改革者たちの神学とクリスチャン生活の基盤は、包括的な宣教の神学を持っていなかったとしても、本質的に宣教的なものであったことは、十分に明らかにされている。⁵⁹

世界中の西側教会における最近の重要な動きは、宣教的教会運動と呼ばれている。⁶⁰ 英国の宣教師であり宣教学者であったレスリー・ニュービギン（1909-1998）の影響が、1990年代に米国の福音派の間で「宣教する教会」という論考を刺激した。この運動は北米の文脈で強力な足場を築き、特に欧米の多くの地域に広がった。宣教的教会は、文化に関わり、福音を宣べ伝え、地域社会に奉仕するという、キリスト教世界後の教会の役割を強調している。教会の中心的な目的である宣教に焦点を当て、信徒が世界における神の贖いの業に参加することを奨励している。

宣教的教会運動はその後、南アフリカにも広がった。南アフリカ・オランダ改革派教会（DRC）の一員として、私も当初は（DRCの牧師として）宣教的教会のための南アフリカ・パートナーシップの設立に尽力した。⁶¹ このパートナーシップは、DRCの指導者たちに教会論的基盤の再考を促した。⁶² 現在、DRCの中核的アイデンティティは、宣教的教会論、すなわち教会であることの宣教的理解に根ざしている。これは非常に建設的な展開だと私は思う。

⁵⁷ Kirsteen Kim, *Joining in with the Spirit: Connecting World Church and Local Mission* (London: Epworth, 2009), p. 23 参照。

⁵⁸ *CWME, Mission and Evangelism: An Ecumenical Affirmation (MEEA)*, in Matthey, 'You are the light of the world', pp. 4-38, quoted in Kirsteen Kim, *Mission Theology of the Church* (2010, 未公開原稿)参照。

⁵⁹ カルヴァン自身の著作には、宣教学的洞察がふんだんに盛り込まれている。さらに、彼の信仰と行動は宣教精神に輝いている。フリップ・ビュイスは、カルヴァンの神学におけるいくつかの基本的な宣教学的前提を明らかにした（主に一次資料に基づく）。これらの前提には、ミシオ・デイの三位一体論的理解、神がその民をあらゆる賜物で用いること、宣教に関する全体的な神の御国の視点などが含まれる。Flip Buys, in "The relevance of the mission strategy and theology of John Calvin for Africa today," *Tydskrif vir Christelike Wetenskap* 13(4), 2013, pp. 159-186を参照。Stéphan van der Watt, "Calvin, Bucer and missionary opportunities in times of crises," *In die Skriflig* 55 (1) (2021), pp. 1-9も参照。

⁶⁰ このイニシアチブを北米の文脈に適用したのは、特に「Gospel and our Culture Network」を代表するダレル・グーダーとジョージ・ハンスバーガーである。Guder, Darrell L (ed.). *Missional church: A vision for the sending of the church in North America*. Wm. B. Eerdmans Publishing, 1998 参照。

⁶¹ Pillay, Jerry. "The missional renaissance: Its impact on churches in South Africa, ecumenical organisations, and the development of local congregations." *HTS: Theological Studies* 71, no. 3 (2015), pp. 1-6 参照。Niemandt, Cornelius J.P., "Five years of missional church: Reflections on missional ecclesiology." *Missionalia: Southern African Journal of Mission Studies* 38, no. 3 (2010), pp. 397-412も参照。

⁶² Benadé, Christo Renier. *A church after God's heart: discerning a missional ecclesiology for the Dutch Reformed Church in South Africa*. University of Pretoria (South Africa), 2019 参照。

しかし、一つの欠点は、宣教的教会運動が現在、宣教を地域だけに集中させる傾向を過度に強めていることである。ミシオ・デイの神学は全世界をその範囲としているが、南アフリカを含む西側諸国の多くの地域で行われている宣教的教会の議論は、（場合によってはもっぱら）地元の信徒に焦点を絞るようになっていく。この狭い焦点は、現地の教会指導者たち、そしてミシオ・デイの論考の多くを、世界宣教や世界キリスト教から切り離すことになってしまう。

さらに、キリスト教時代やキリスト教世界後時代を経験していない非西洋の教会では、宣教的教会の議論は十分に文脈化されていない。したがって、日本のような文脈では、宣教的教会運動が確立されるために必要な傾聴、分析、研究という課題がある。適切な文脈づけなしに、単に複製することはできない。川野雄一や倉澤正典のような日本の福音派の研究者の中には、現代の日本の福音派の信徒における宣教的教会論の神学的妥当性を理解するために、宣教的教会観を構築する必要性を強調している者もいる。⁶³ 宣教学と教会論は歴史的に独立して扱われてきたが、川野氏は、宣教は教会を理解する上で極めて重要であるため、両者は組み合わせられなければならないと主張している。さらに川野は、教会とその居場所を確立する上で、神の国という考え方がいかに重要であるかを強調している。

日本の多くの福音派教会（福音主義を掲げる日本キリスト改革派教会（RCJ）のいくつかの教会を含む）では、教会の使命は伝道と狭く理解される傾向がある。宣教と伝道は混同されるべきではなく、正しく区別されるべきである。伝道の中心性を保ちつつも、宣教の全体的な理解を明確に確認し、意図的に実行することが、日本の福音主義教会に求められているのである。この点で、神の国の概念は、教会のミッションの焦点を決定する上で極めて重要である。⁶⁴ 神の国の概念との関連において教会の宣教を定義するとき、それは単に伝道という課題にまとめられるものではない。

篠原基章は、日本における教会の4つの特徴的な歴史的モデルを批判的に評価した。⁶⁵ これらの教会モデルは、4人の著名な日本のキリスト教指導者（上村正久、内村鑑三、中田重治、賀川豊彦）によって実践されたものである。篠原氏の評価は、現在の（欧米からの）宣教的教会の論考を考慮しつつ、5回連続で開催された日本伝道会議（1974年から2009年まで）の宣言を統合して行われている。

篠原は、ミシオ・デイや神の国といった神学的テーマを取り入れることで、実践的な教会理解を統合的な宣教的理解へとシフトさせることができると主張している。彼は5つの理論的転換を提案している。宣教的な教会になる、

- (1) 教会とその使命が実利主義と活動主義に終始しないよう、教会の機能的理解から宣教的理解への転換が必要である。
- (2) 福音について、一方的な理解からより包括的な理解への転換が必要である。

⁶³ 倉沢正則、「伝道の担い手」、『福音主義神学』40（2009）、117-144頁；川野雄一、「伝道の結実—教会建設」、『福音主義神学』40（2009）、171-193頁；また川野雄一、「伝道の結実—教会建設」、『福音主義神学』40（2009）、171-193頁参照。

⁶⁴ Ott, Craig, Stephen J. Strauss, and Timothy C. Tennent. *Encountering theology of mission (encountering mission): Biblical foundations, historical developments, and contemporary issues*. Baker Books, 2010, p.86 参照。

⁶⁵ Shinohara, Motoaki. "The Church as God's Missionary Community: Towards an Evangelical Missional Ecclesiology with Implications for the Japanese Church." PhD diss., Trinity Evangelical Divinity School, 2012, pp.173-266 参照。

(3) 宣教について、部分的な理解からより全体的な理解と実践への転換が必要である。教会は単に福音を宣べ伝えるだけでなく、言葉と行いにおいて福音を実践するよう召されている。

(4) 私たちは、神の使命に参加するために、神によってそれぞれの地域の状況に遣わされた人々として、私たちのミニストリーの焦点を内部から外部へと移さなければならない。

(5) 私たちは、社会や文化に対する宣教の関わり方を、退却／拒否から関与へと転換しなければならない。

篠原の提案は、ある人にとっては新しいニュースかもしれないし、ある人にとっては常識かもしれない。すでにこれらのシフト案に参加している教会もあれば、考えたことすらない教会もある。また、高齢化社会と教会における人材不足に閉塞感を感じている教会もあるだろう。いずれにせよ、神の世界宣教への参加という地域的・世界的な表現に照らして、これらの課題について考えることは重要である。

多くの点で、福音は日本文化と衝突し、押しつけがましいものとみなされている。この複雑な状況の中で、教会は複数のカルト、神話、迷信、キリスト教のさらなる疎外などの猛攻撃から生き残るために戦っている。RCJ の強固な教義と理性的な基盤は、多くの人にアピールしているが、すべての人にアピールしているわけではない。その伝統的な礼拝スタイルは、改革する・興すためにもっと開かれたものであることが問われている。しかし、諸教会の明確な伝道的姿勢と御言葉に忠実な説教は、極端な相対主義の時代にあって称賛に値する。信徒たちは、(時には) 敵対的な社会・政治環境の中で(秘密裏にはあるが) 生き残りをかけて戦っている。さらに、信徒は急速に高齢化しており、信徒を非常に大切にする教会文化も理解できる。教会はまた、社会の世俗化や行き過ぎた物質主義との苦しい戦いの中でもがいている。⁶⁶

地域の信徒と一般社会との間にある大きな隔たりには、建設的かつ創造的に取り組む必要がある。知的主義や正統主義に偏重するあまり、福音の意味を現代の日常生活と結びつけることに失敗しているのではないか。さらに、牧師中心の指導スタイルは、信徒が教会生活とミニストリーにおいて十分に活用されていないことが多いことを意味するかもしれない。これは、競争によって繁栄する社会の労働倫理によって悪化しており、教会に関連する活動のための余裕や時間はほとんど残されていない。

IV. 日本における、そして日本のための宣教学的的研究の意義と必要性

あらゆる国にキリスト者が存在することで、キリスト教は純粋にグローバルな宗教となり、世界レベルでの教会の協力が新たな仕方で形作られている。福音宣教をより全体的に理解することが、今まさに求められているのである。神の宣教の不可欠な要素として、礼拝(レイトゥルギア)、交わり(コイノーニア)、宣べ伝えること(マルトゥリア／ケリュグマ)、憐れみ深い奉仕(ディアコニア)の相互のつながりは、関わる上で極めて重要である。⁶⁷ 教会はその本質からして宣教的で

⁶⁶ 文化人類学者のデイヴィッド・C・ルイスによれば、日本における「世俗化」についての主張は、「宗教性を測定する試みの正確さに左右される」ことを考慮し、慎重になされるべきであると。したがって、ルイスの最新刊『日本人の日常生活における宗教』では、日本人は組織化された宗教から離れ続けており、世俗化に抵抗し、宗教的行動によって明らかのように、スピリチュアリティを示し続けていると主張している。David C. Lewis, *Religion in Japanese Daily Life* (New York, NY: Routledge, 2017), pp. 28-32 を参照。

⁶⁷ Stefan Paas, "Missionary Ecclesiology in an age of individualization," *Calvin Theological Journal* 48 (2013), pp. 91-106 参照。

あることを考えれば、教会の使命の第一の焦点は、神の国のしるしであり、前触れであり、道具であることに変わりはない。

進化する学問分野としての世界キリスト教は、キリスト教研究において西洋の中心的な位置付けを取り除くために存在するものである。宣教学は、私たちの宣教実践を批判的に精査し、多元化が深まる中で私たちの宣教神学の核心を見極めるよう、私たちに挑戦している。宣教学の「虻」の役割、すなわち神学の他のすべての分野に影響を与えるという役割は、決してエネルギーの無駄遣いではない。私たちのすべての宣教実践は、健全な宣教神学によって啓発される必要がある。⁶⁸ 単に（魂の）救いのための伝道を最終目標とするのではなく、キリストに向かって成熟するために弟子として成長していく複雑なプロセスに取り組む必要がある（エフェソ4:13-16）。この旅路は、個人と信仰共同体の態度、行動、価値観の根本的な変容を伴う、生涯にわたる巡礼の旅を意味する。⁶⁹

この講演を通して、宣教学があらゆる時代、民族、地域を扱う学問分野であることが明らかになった。宣教学は宣教の動機、方法、主体、目標を研究し、その結果を評価する。加えて、宣教学は学際的な探究分野であり、宣教の神学、実践、歴史、さらには文化的、宗教的、社会的に与える影響についての批判的研究も含まれる。ローカルとグローバルの絡み合ったつながりは変化している。キリスト教が世界的宗教として存在し、私たちが世界市民であることを自覚しているという事実は、ある地域におけるキリスト教の物語が、別の地域におけるそれを形作ることを意味する。グローバルな論考が変化すれば、ローカルな論考も変化し、その逆もまた然りである。世界のキリスト教は、世界と地域の文化、神学、自己認識がどのようにお互いを形成しているかを見るためのレンズとなる。各地域の人々がイエス・キリストの普遍的な福音を受け入れるにつれ、彼らがその地域で信仰を実践する方法は、世界的なキリスト教のあり方に影響を与える。

日本の多くの神学校や教会は、もともと欧米で作られた神学カリキュラムにある程度依存し続けている。というのも、何世紀にもわたって法や習慣を導いてきたキリスト教パラダイムが西洋に支配していた時代とは対照的に、今日のキリスト教は、先に説明したように、ますます非西洋的な宗教になっているからである。私たちの神学教育は、多数派の世界から生まれた学問に精通する必要がある。西洋の学問は、ある種の標準化された優れた神学を生み出すわけではない。⁷⁰ 例えば、韓国、アフリカ、ダリット（インド）の学者から、贖罪やキリスト論に関する驚くべき洞察を見出すことができる。

RCJと韓国の諸教会との現在の宣教協力関係は、決して当たり前のことではない。日本の改革派教会の牧師の約10%が韓国系であることは、日韓間の敵対関係の歴史を考えれば、実に奇跡的としか言いようがない。さらに、RCJの証しは、ハンガリー、ガンビア、カンボジア、南アフリカ、米国、オランダの他の宣教パートナーとともに世界的な広がりを見せている。私たちは、完全に双

⁶⁸ Guder, D., 2015, *Called to witness: Doing missional theology*, Eerdmans, Grand Rapids, MI 参照。

⁶⁹ Ma, W. & Ross, K.R., 2013, *Mission spirituality and authentic discipleship*, Regnum Edinburgh Centenary Series, 14, OCMS, Oxford, p.232 参照。また、Balía, D.M. & Kim, K. (eds.), 2010, *Edinburgh 2010 (Volume II): Witnessing to Christ today*, Regnum Books, OCMS, Oxford, p.211 参照。また、Zscheile, D.J. (ed.), 2012, *Cultivating sent communities: Missional spiritual formation*, Eerdmans, Grand Rapids, MI. 参照。そしてまた、Van der Watt, Stéphan., 2023, 'Mission-minded pastoral theology and the notion of God's power: Maturity through vulnerability', *In die Skriflig* 57(1), a2924 は、伝道、宣教、霊的形成／成熟のトピックを統合している。

⁷⁰ Pardue, Stephen T. *Why Evangelical Theology Needs the Global Church*. Baker Books, 2023 参照。

方向的、さらには多方向的な新しいレベルの宣教協力関係を結ぶ必要がある。世界中の神学校や神学教育機関の間に、相互性の新しい時代が開かれつつある。日本のようなキリスト教以前の文脈から来た信者は、例えば、宗教的に多元化した社会における個人伝道や開拓伝道というテーマについて、キリスト教世界後の共同体に住む人々にとって有益な洞察を得ることができる。⁷¹

宣教学は、地域教会の外にある世界への関心を持ち続けることを助けてくれる。宣教学はまた、(西洋から)脱中心化したグローバルな視点を強調し、社会科学の活用を強調している。私たちの神学校は、宣教の足場を取り戻す必要があるのではないか。我々は、フルタイムの聖職に召されていない99%のキリスト者(一般信徒)をも養成する、新しいタイプの使徒的な信徒のリーダーシップを生み出すよう求められていると思う。このような幅広いアプローチは、(残りの1%に)聖職資格を与えることだけに限定されたビジョンを超える助けとなる。

V. 終末論的観点から見た教会の使命

これまでしばしば、宣教学は教会成長と同一視され、軽蔑されてきた。この種の宣教学は、神学的考察の代わりに実用主義のものであり、私が提供するタイプのアプローチではない。宣教学と神学は別個の学問分野としてではなく、握り合った手、相互に浸透し合う全体の2つの部分として見なされるべきである。宣教学は、神学が神の救済目的に焦点を当てるのを助け、私たちが文化的背景を分析するのを可能にする。このように宣教学は、将来の牧師が教会変革、地域伝道、開拓伝道、教会形成、指導者育成のための戦略を開発できるように導くものである。健全な神学教育においては、神学と宣教学は互いに積極的に形成し合うのである。

神学教育は、(それ自体が)最終目標である教会での聖職に就く牧師だけに焦点を当てているわけではない。本校では、将来の牧師や教会指導者を教え、養成している。彼らは、日常生活という「宣教の場」において、キリストに従う者としての宣教のために信者を備えさせるよう召されているのである。さらに、あらゆる国々への世界的な宣教について広い視野を持つことで、私たちが日本だけの懸念にとらわれることを防ぎ、私たち自身を世界キリスト教の一部として理解することができる。

真に聖書的な終末論的文脈においてのみ、教会を通した神の使命を適切に理解することができる。そのためには、新しい天と地を備えた新しい創造という聖書概念を心から受け入れることが必要である。この新しい創造は、イエスが神の国の樹立を宣言し(マルコ1:14-15、ルカ17:20-21、マタイ4:17-23、6:33など)、悪の力を打ち砕いた後に死からよみがえったときに始まった。彼が華

⁷¹ アジアは世界で最も宗教的に多元的な大陸である。この現実には、この地域のキリスト教にとって多くの意味を持つ。この点に関して、サンクイスト(Sunquist, Scott W. *Explorations in Asian Christianity: history, theology, and mission*. InterVarsity Press, 2017, pp. 1-2)は非常に適切な発言をしている。「ヨーロッパでは、キリスト教徒は幸運にも多くの支配者がキリスト教徒となり、キリスト教の信仰を強制されたところに住むことができた。こうしてキリスト教は王家の宗教として繁栄した。しかし、アジアは違った。アジアはキリスト教の表現において常に異なっていた。他のどの大陸でも、太平洋の島々でさえ、キリスト教は支配者の支援や保護によって大きく発展してきた。アジアのキリスト教徒はこのような経験をしていない。このことを強調しすぎることはできないと思う」。アジアの文脈がいかにキリスト教にユニークな課題をもたらすかという問題については、サンクイスト(Sunquist, Scott W. *Understanding Christian mission: Participation in suffering and glory*. Baker Academic, 2013, pp. 27-41.)を参照のこと。

麗に再臨し、すべてを新しくするとき、新しい創造が完成する（黙示録21:1-5）。教会の使命はその発足に由来しており、それはイエスを死から蘇らせた同じ聖霊によって動かされたものです。キリストの体として、私たちはその完成を予期し、今日でさえもその変容の力を示している。

私たちは、地上における神の御国のために働いているのであって、自分たちで御国を建てようとしているのではない。神はご自身の時と方法で、イエスの死と復活を実践することによって御国を築かれる。聖霊の働きによって、私たちは、教会の現在の存在、活動、また祈りのすべてが、その御国を築く努力の一部であると信じている。弟子訓練と伝道、正義と平和の追求、そして愛のわざ（ディアコニア）によって、私たちが現在行っていることは、来るべきものに対する複雑で純粋な予期を生み出す。本質的に、私たちはイエス・キリストの福音を通して神がなさろうとしていることに参与しているのである。

宣教とは、墮落し、悪にまみれた世界の死の淵で、福音の創造刷新の力によって私たちが行うことなのである。私たちの教会観（*教会論*）は、*宣教への呼びかけ*に由来し、それによって形成されなければならないが、*宣教そのものが終末論*に由来することを忘れてはならない。イエスの十字架と復活において、神は世界を奴隷にした権力を打ち破り、新しい創造を開始された。⁷²

私たちキリスト者の証しは、最終的には聖霊の助けによってのみ促され、維持され、効力を発揮する。教会は聖霊の働きを指示することはできない。御霊は風のように御心のままに動く（ヨハネ 3:8）。しかし教会は、聖霊の導きを祈り求め、被造物全体に新しい生命を誕生させる聖霊に協力する適切な方法を見極めることができる（第二コリント 3:18; 5:16-21）。今日、父なる神は、御子イエス・キリストを遣わされたように、私たち教会を遣わされている。私たちは御霊の力によって、御霊の民として遣わされ、御霊の贖いと回復の使命を推進する。私たちは三位一体の神の宣教の民であり、遣わされた民である（ヨハネ 20:21-22）。⁷³

⁷² Wright, Nicholas Thomas, and Michael F. Bird. *The New Testament in its world: An introduction to the history, literature, and theology of the first Christians*. Zondervan Academic, 2019, pp. 878-889 参照。

⁷³ Milton J. Coalter and Virgil Cruz. *How Shall We Witness? Faithful Evangelism in a Reformed Tradition*. Louisville, Ky.: Westminster/John Knox Press, 1995 参照。